

論文の和文要旨

論文題目	小笠原諸島における日本語の方言接触 —方言形成と方言意識—
氏名	あべ しん 阿部 新

本論文は、小笠原諸島における日本語の方言接触を「方言接触論」の観点から検討し、さらに、方言接触状況における心理的・社会的要因に目を向けて、理論的發展を目指すことを目的とする。

第1部では、本研究の理論的背景と社会的背景について整理し、本研究の目的の位置づけを行う。

これまで、日本での方言接触についての研究は比較的散発的に行われ、単に「方言の接触があった」との説明だけで方言変化の説明を終えてしまうことも多い。そこで本研究では欧米の「方言接触論」の研究成果を用いて、方言接触による言語変化のメカニズムやその原因を検討する。

また、これまでの方言接触論では、新しい方言の形成における心理的側面として、社会心理学の適応理論が重要であるとされてきた。方言形成の初期には、接触した「個人間」において、両者が互いの言葉を近づけるという取束が起こると考えている。しかし、「個人内」の心理状態や個人が社会内で持つネットワークも変化となんらかの関連を持っていることは十分考えられる。そこで本研究では、これまで方言接触の研究ではあまり扱われてこなかった「個人内」の心理面・社会面に焦点を当てる。「方言や方言使用への意識」と「社会ネットワーク」に注目して、方言意識、個人の心理、社会ネットワークと言語使用との関連をアンケートの集計結果から多変量解析によって分析する。

調査地の小笠原は、地理的には本土から離れて隔絶された島である。そのためマスメディアからの情報が乏しく、共通語との接触も少ない状態がこれまで続いていた。また、社会的に安定していた期間が短い。1830年に欧米人とハワイ人25名が最初に定住して以来、明治時代には日本領と確定して八丈島からの移民が入植し、第二次世界大戦の終戦まで、日本各地からの移民が暮らした。戦後米軍領となってからは、最初の定住者の子孫（欧米系島民）のみが住むことが許された小規模な社会があり、それ以外の島民は本土に疎開させられたままであったが、その後1968

年に日本に返還されてからは、本土に疎開していた島民（旧島民）と、新たに移住してきた人々（新島民）が暮らし、方言が接触する社会となっている。これまで小笠原についての言語文化研究は主に欧米系島民についての研究が多かったが、本研究では研究対象を欧米系島民に限ることなく、小笠原で起きた二回の方言接触に注目し、分析していく。

第2部では、小笠原諸島において起こった二度の日本語の方言接触の実態を方言接触論から検討する

まず、一回目の方言接触について、第5章で227個の語彙を検討した。その結果、植物動物料理名の語彙には小笠原独自の語彙が圧倒的に多く、それ以外には関東以西の太平洋沿岸の方言で使われる語が多いことが分かった。また、一般名詞・動詞・形容詞・副詞・間投詞については、主に八丈島・関東甲信越・東海・東北など東日本の各地方で使われる語彙が多く、方言の混合（dialect mixing）が起きていたことが分かった。また、八丈島方言の語形が45%程度を占め、多数派の変異形がlevelling（水平化）において残ったものと思われる。一方、共通語化と見られる変化もあった。動詞や形容詞などの活用のある語のうち、八丈島方言に特有の活用語尾（/owa/, /kya/）が失われ、共通語の活用語尾となったり、方言形と共通語形の中間方言形が見られた。これは共通語と方言との間にできた「ネオ方言」の語形であるといえるだろう。

第6章では植物語彙についてより詳細に検討した。非日本語の語源を持つものは、日本人が入植する以前の小笠原におけるビジンからクレオールへの拡大過程において発生し、その後、このクレオールが日本語の方言（主に関東以西の太平洋沿岸の方言）と言語接触したり、方言同士が接触する中で現在の言葉に取り入れられたのだろうと結論づけた。

第7章では一段動詞命令形について、共通語や八丈島方言で「～ろ」となるところを「～れ」となる現象（例：「寝れ」「見れ」など）について考察した。これは動詞の命令形活用語尾について、五段動詞命令形では母音がエ段になるところを、一段動詞ではオ段になるという有標性を排し、規則性を重んじた結果（unmarking）であり、共通語化とは異なる、方言接触による変化であろうと結論付けた。この形式は現在の中高生の中に使う者もいることがアンケートから分かった。この状態は、方言接触が起きている状態の中で習得すべき方言がないために子供が化石化した方言を習得してしまった colonial lag の結果であると推測される。

さらに第8章では、音声、特にアクセントについて検討した。一回目の方言接触においては、多数派の特徴が残るという水平化（levelling）の結果、八丈島方言の特徴である「無アクセント」であったことがわかった。一方現在まで続く二回目の接触では、有型アクセント同士の接触によって水平化・無標化・中間方言の発達と説明できるような現象が見られた。現在の高校生の生え抜きは、体系としては有型アクセント（東京式アクセント）でありながら、ピッチ幅が全体的に狭いという（無アクセント的）特徴も持つというアクセントになっているという、「中間方言形の発達」（interdialect development）が見られた。

第3部では、方言接触下での話者の心理的側面と社会的側面について分析した。方言接触下の心理面での研究として、「個人間」の心理に注目した適応理論ではなく、「個人内」の心理とネ

ットワークに注目する。

まず、第 10 章では小笠原での方言意識と新方言・若者言葉・流行語の使用、およびメディア接触との関連について、アンケート結果を多変量解析によって分析し、練馬と比較した。

小笠原でも練馬でも、流行語や東京語の使用がテレビの長時間視聴や自分の言葉の特徴の把握と関連していた。このことから、メディアが他者と接する窓となり、他者が自分とは異なっていることを知るための鏡となっているということが推測できる。さらに、練馬では、関西が好きだという意識を持つグループがあり、そのような意識は長時間の民放視聴と関連していたことから、メディアによって他者を積極的に知り、さらに他者に何らかの評価を下すという行動があることが推測される。しかし、関西が好きだからといって、関西からの若者言葉を使うというような傾向はない。あくまでも他者を知るだけであって、他者と自分が同じになってしまうことまでには至らないようである。一方、小笠原ではほぼ全員が東京を好きと答えた。しかし、東京が好きだからといって、メディアと頻繁に接する傾向もない。他者を知るという行動にまでは至らない。これはこれまでの情報との接し方、情報収集の仕方の違いが現れているのであろう。ごく最近まで小笠原では情報量が乏しかった。好きだからその情報をもっと欲しいと思ってもその情報を探したり、複数の情報から欲しい情報を選択できるような状況ではなかったのである。

また、第 11 章では伝統的方言項目の使用や東京語アクセントの聞き取りテストの結果と言語外的要因との関係を分析した。

言語外的要素は心理的項目と社会的項目に分けられるが、重要なファクターを求めたところ、心理的項目として「地域の好悪」「言葉の好悪」「言葉の違いの認識」、社会的項目として「地元や東京との関連」「地域内外の交流」といったファクターがあることが分かった。さらに、伝統的方言項目の使用と言語外的要因の関係について多変量解析を行ったところ、方言項目を使うという回答と心理的項目と社会的項目が関連したグループ分けができ、「方言認知」「方言過小評価」「方言無視」「方言無知」と名付けた。さらに、「東京語アクセントの聞き取りテスト」の正答率と言語外的要因との関係を分析した。小笠原でも首都圏でも正答率を上げるのは「よそ者」であり、下げるのは「内部の人間」であり、アクセントの聞き取りに関しては心理的項目よりも社会的項目が重要であることがわかった。均一な社会では心理的な違いがメンバー間の差異となるだろうが、いろいろな社会的背景を持ったメンバーが集まっている小笠原や首都圏のような方言接触社会では社会的属性の方が重要だ、ということがわかった。

最後に第 4 部ではこれまでの小笠原での方言形成についてまとめ、今後の方言形成の行方を考察する。

二回日の接触では、個人内にもいろいろな変種からの要素が入り込み、個人間で比べてみてもいろいろな要素の組み合わせが見られて、極度に多様な状態であった。人口が増加傾向を示していたこの時代には、つねに新たな方言接触が起こり、また共通語との接触による共通語化・ネオ方言化も起こっていた。二回日の接触では、動詞の活用形とアクセントについて検討した。活用形の方がやや多様な状態であり、アクセントの方が活用形に比べて収束しているようだった。このような違いは、言語要素によって収束のしやすさが違うということであろう。アクセントに比

べて語彙のほうが変種の数が多くなる可能性が高いので収束しにくいのではないかと思われる。

以上から、今後の小笠原での方言形成の行方を考えると、まず、接触する方言のパラエティーが豊かならば、収束しにくく、パラエティーが少なければ収束しやすい。言語要素によっても収束のしやすさが違う。語彙についてはいろいろな語形が入り込みやすいので、収束しにくいですが、アクセントなどはそれほどパラエティーがない場合には収束しやすい。

また、社会的要素から考察すると、方言接触の場面においては、すべての人が均質に接触に参加するわけではなく、交流の大小・ネットワークの疎密によって、接触を促進しているかどうか異なることが分かった。小笠原において接触を促進しているのは、緩いネットワークの中で交流を多く持つよそ者である。交流が少ないよそ者や交流が少ない内部の者はそれぞれ他のグループと接触は少ない。人口の流動性が少なくなれば、交流の頻度やネットワークの密度が安定していくので、収束しやすくなっていくと思われる。

さらに、心理的要素から考察すると、小笠原の中高生はメディア特にテレビからの情報が増えたことで流行語および東京新方言と接する機会が増えた。そこで自分の言葉に地元言葉の特徴があると感じている者はこれらを使う傾向があるということが分かった。しかし、情報を積極的に受信するという行動については、発展途上のようなものである。今後、メディアを通じて異なる方言と接する機会が増えたとき、自分の言葉と他者の言葉が同じか違うかに意識を向け、他者と自分を同一視せずアイデンティティを確立する必要があることが分かった。意思疎通が可能な言語変種であっても、いろいろな変種が使われる移民社会の小笠原では、「異文化理解」のために「異文化コミュニケーション」が必要である。それが十分行われるようになったときに、小笠原には小笠原の「地域アイデンティティ」が生まれ、その中で言語や言語意識が収束したときに「方言アイデンティティ」が生まれるだろうと結論付けた。